出会い（14）

修道生活きのうきょう

トンスーラ

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

一般的には、余り関心のないことかもしれないが、大聖年とよばれる西暦二千年を迎えたカトリック教会の歴史の中で、第二バチカン公会議といわれる世界司教総会は、前古未曾有の画期的会議であった。1962年から1965年にわたって、ローマで開かれ、急速に激変する現代社会に対応すべく、それまでの閉鎖的教会から開放的教会へと、極めて大胆なコペルニクス的転回が、あらゆる領域にわたって行われてきた。そのために当然起きてくるものは、保革激突である。今ここでは、カトリック教会の修道的伝承のごく些細な個人的体験の事例を前号に続いて紹介させていただく。私がカルメル会に入会するため渡仏したのが、今から五十年前、1951年6月のことであり、第二バチカン公会議を十年以上さかのぼる。

トンスーラ（TONSURA：ラテン語）

中世カトリック教会の修道者の習慣には、トンスーラという剃髪の習慣があった。司祭叙階にも同じような儀式があったが、そこでは、後ろ髪にハサミをいれて、2〜3センチぐらい丸く刈りとる一種の通過儀礼であった。修道者のトンスーラは、それとは異なり、十字架上のキリストの頭にかぶせられたと聖書に記されている茨の冠を想起させる形で頭髪を輪の形にする（参照マタイ27.29並行箇所）。それをトンスーラと呼ぶのだが、毛がのびてくるたびに、また新たに剃らなくてはならない。日本昔話では河童の頭を連想させる。西欧中世を取材にした映画や絵画には、折にふれてそのようなトンスーラの修道者を見られた読者もあることと思う。俗世を捨てて修道の生涯を神に捧げる象徴である。仏教の剃髪にも似ている。いずれも特殊な修道の風習であり、修道院内で互いに髪を剃り合う習慣であったことは、仏教の出家僧の剃髪と同じ。

そのとき知ったことだが、人間の頭も、左右同じようでいて、同じではないということであった。指二本の巾の輪を作るようにといわれて、右から始めていくうちに、左側になると髪巾がちがってくる。そこで狭い方の髪にあわせて、広い方を刈りこむ。するとまた刈りこみすぎて、片方が広くなりすぎてしまう。そんなことを繰り返しているうちに、とうとう、わたしが刈った修練長殿の頭は、虎刈りの丸坊主になってしまった。しかも途中で古いバリカンのこぼれ歯に髪がひっかかると、髪の毛を引き抜くしかない。「あっ痛い! こら、人殺し!」と叱られながら、心の中で「ご免」というのが、精一杯。なにしろフランスではその頃、丸坊主の頭は刑務所にいる囚人だけだと教えてもらった。キリスト信者はキリストの囚人である（エフェソ 3.1, 4.1）、というような立派な事とは、話がちがう。丸坊主の髪がのびるには、ほぼ一ケ月かかる。こんなマンガチックな修道生活一年生の小さいできごとが、今では、懐かしい想い出のひとつとなる。

こうしたトンスーラの習慣は、第二バチカン公会議が始まる頃から姿を消していった。その後1972年には公式に廃止されて、若者並みの長髪神父や修道者が登場するようになった。それとともに、修道の生活規則全体が弛んできた。トンスーラは、そのひび割れを示す一事例にすぎない。その頃「世俗化の神学」が真剣に問われたが、結局、俗化の潮流に呑みこまれていく危機がカトリック教会にも生じた。なにごとでも、築くには時間と忍耐が要るが、壊すには、力もいらず、たちまちに捨て去られてしまう。そこでは捨てるべきものと捨ててはならないものを識別し、新しいものを創造する知恵と勇気とが求められる。

そのうちの、トンスーラはおそらく捨て去られてもよいものであったであろう。しかし、そこに象徴されていた、キリストと共に父なる神に自分の生涯を捧げる受難の意味は、失われてはならない。それに信仰生活は具体的な形なしでは育たない。ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、前教皇パウロ六世の意向をついで、修道服の着用を強調し続けてこられたのも、その意味をもつ。教皇ともあろうものが、服装のような事にこだわるのはおかしい、というだけではすまされないものが、そこにあるのではなかろうか。

向かって左列の前から3人目が筆者

人間の不思議は、「身心一如」即ち、体と心とは一つのものであって、いつも両者の調和が見出されなくてはならない。孔子の言う「中庸」、仏教の「中道」、そしてカトリック神学の基底となってきたギリシャの聖哲アリストテレスの言った「理性的中間」というのは、すべて同じことを意味する。今ではトンスーラに代わる一分刈りが、観想修道会や、修道の刷新をめざす共同体の中にも、静かに広がりつつあるのは、何かよい方向を示唆しているのではなかろうか。真の創造は、単なる新奇を意味しない。伝統に根ざしてのみ、創造は可能である。

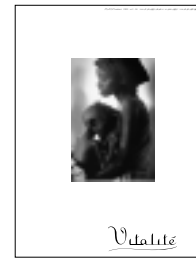
大学で教えていた頃のコボレ語が思い出される。カトリック校であったので、「カト研」というグループがあった。幾人かのカトリック学生と一般学生がいりまじっていた。そのうちの一人の女子学生が言った質問が思い出される。

「この頃、ローマン・カラーの代わりに、ネクタイをつける神父さんや、修道服をやめて私服を着るシスターが増えてきたのは、一般の人たちにも親しみを感じさせるためと聞いたけど、わたしには、よく分からない。今も昔の僧衣を身につけ、丸坊主の修行僧や尼さんの方が、ずっと親しみを覚えるのは、なぜかしら?」

仏教とキリスト教では、宗教的体質が大きく異なるとしても、現代社会への対応の仕方は、双方とも、既成宗教の場合、まことに、ぎこちない。「宗教なき現代。現代なき宗教」という名言を残して去ったのは、哲学者西谷啓治であった。既成宗教の現代への不適応は、余りにも世俗化した新宗教によって補われるものではない。まして、警察沙汰になる邪教を奸悪な手段をもってひろげる新々宗教には、現代も未来もない。問題は錯雑であり、その悪の根は深い。

一女子大学生の問いは、宗教的人間像の現代的視点を示していたように思う。「本（もと）立って、末（すえ）生ず」は、どの宗教にも、その本質が今、問われている。余りにも末梢的な日々の生活に追われて、「唯一の必要なもの」が見失われているのが、現代の病いではなかろうか。

〈 表紙の写真 〉



クリス・スティール＝パーキンス
「ソマリアの母と子」1992年（原版はカラー）

それは「ソマリアの母と子」と題された三枚組みの写真でした。内線が続くソマリアでは、飢餓や病気で数え切れないほどの大勢の子どもたちが死んでいきつつあります。クリス・スティール＝パーキンスの写真は、その悲しい現実を柔らかな光を取り込んだカラーフィルムで写し撮っていました。痩せ細った母親の腕に抱かれ、その乳房を求める赤ん坊の小さな頭には大きなハエが止まり、落ち窪んだその眼からはわずかな生命力も感じられません。若い母親の表情も悲しそうです。あまりにも哀しい写真。しかし、淡い光のなかに立つふたりは、なんと神々しい母子の姿なのでしょうか。

「現代の聖母子像のようだ…」と、わたしはその写真の前に釘づけになってしまったのです。

山田美也子著 『ふたたび「愛する」ということ』（晶文社 2000年）より引用

〈 メッセージ 〉

母と子のいのちはひとつに
つながっている　昼も夜も
一緒に呼吸し
一緒に見つめ
一緒に驚き
一緒に食べている